かたりべ 72

豊島区立郷土資料館だより

11月15日に実施した「企画展みどころ解説」のようす

列品の様子〔Ⅱ伊兵衛三之烝・政武父子の著作〕

園芸文化研究・地域史研究の深化に向けて

郷土資料館では、一〇月八日から一一月三〇日までの会期で企画展「伊藤伊兵衛と江戸園芸」を開催いたしました。この展示会は、上駒込村染井（現駒込七丁目）に居住し、江戸で一番の植木屋と呼ばれた伊藤伊兵衛が、江戸の園芸文化の発展にどのような役割を果たしたのかについて、主にその著作から考えていくことをテーマとしたものです。会期中は、多くの方々のご来館を賜り、直接ご質問をいただいたり、また、アンケートを通してご意見・ご感想等をお寄せいただきました。本当にありがとうございました。

ここでは、今回の企画展で得られた成果について、二点にまとめて触れておきたいと思います。

(1)伊藤伊兵衛に関する新資料の発見

企画展の事前調査段階で、伊兵衛の著書三冊『歌仙楓集』・『新歌仙楓集』・『追加楓集』と関連資料二点「三夕楓之図」・「きりしま古木の図」を新たに見いだすことができ、それらを所蔵者（機関）のご好意により、借用・展示することができました。

(2)伊藤伊兵衛に関する研究深化への期待

新発見資料の分析により、伊兵衛の植木屋および園芸研究者としての人間像がより豊かになりました。また、伊兵衛政武の没年については以前より論争がなされてきました（元文四〔一七三九〕年説と宝暦七〔一七五七〕年説）が、先に掲げた「三夕楓之図」の発見により、今後新たな展開が期待されています。

伊藤伊兵衛についての研究は、単にかつて豊島区に居住した人物の問題に留まらず、江戸の園芸文化研究や都市近郊地域研究の解明に直接つながっていくものです。今後も新資料の発掘と分析を継続的に行い、そこで得られた成果を折にふれて資料館事業のなかに位置づけていきたいと考えています。

（秋山）

郷土資料館の公式ホームページを開設いたしました！

以前よりご要望の多かった郷土資料館の公式ホームページが、ついに二〇〇三年九月末に開設されました！　本欄ではホームページの内容と、簡単なアクセス方法について紹介したいと思います。

○常設展

トップページの写真にある四つのテーマの常設展示、「雑司が谷鬼子母神」「駒込・巣鴨の園芸」「長崎アトリエ村」「池袋ヤミ市」、それから分館の「雑司が谷旧宣教師館」をクリックすると、詳しい展示案内が始まります。

○お知らせ

また、郷土資料館からの最新お知らせも要チェックです。今まで、各種講座の参加者募集は、新聞折込・区役所関係施設・駅等で配布している『広報としま』で行ってきましたが、ホームページでも募集記事を掲載し始めました。

○年間行事予定

一年分の行事予定を掲載しています。展示、講座、刊行物の発行予定、休館スケジュールなどがチェックできます。

○これまでに開催した展示

一九八四年の開館以来、当館で開催してきたすべての展示の概要と、図録の有無、在庫状況等を紹介しています。

○刊行物のご案内

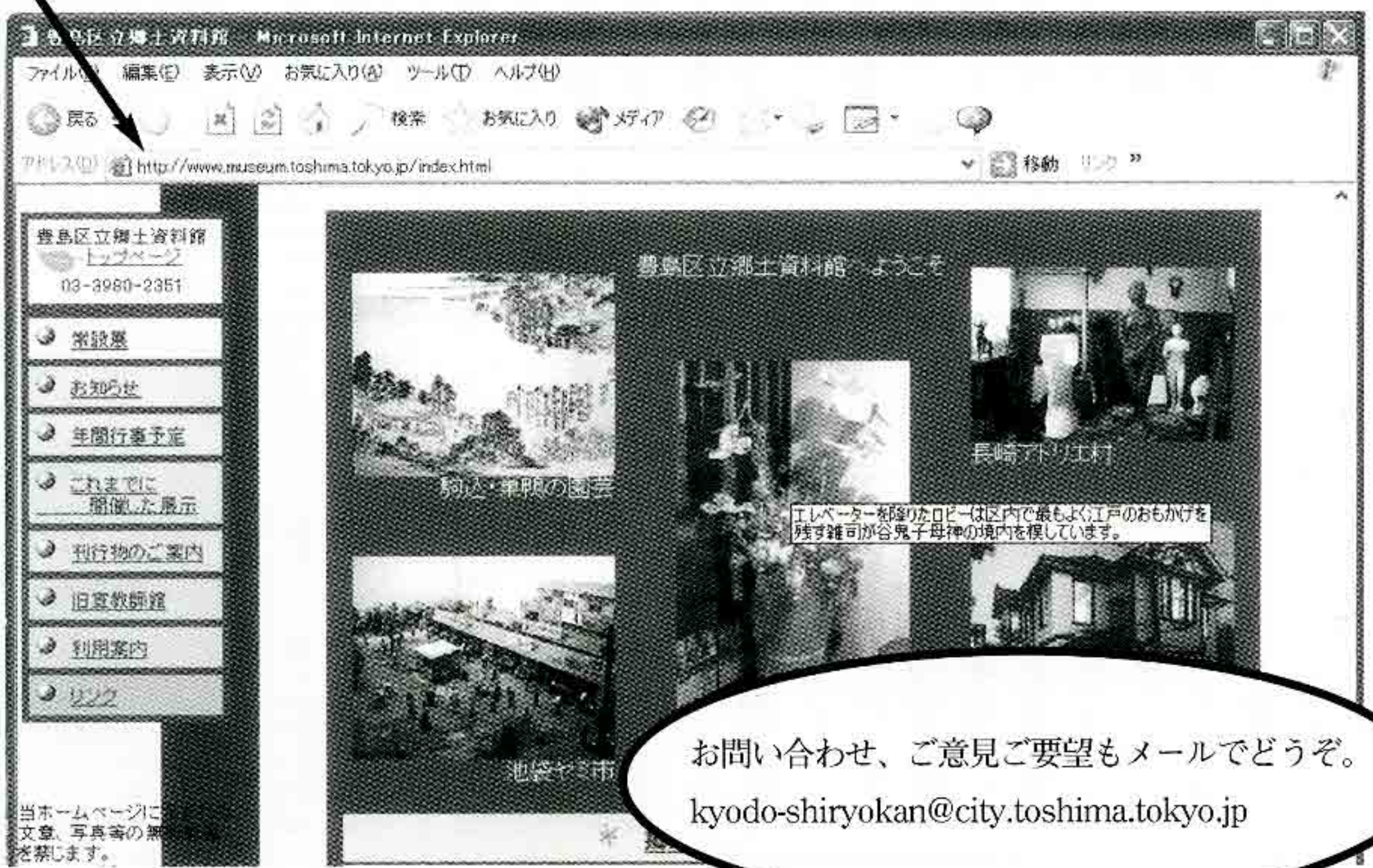
郷土資料館では、次のようなさまざまな刊行物を発行してきました。

☆常設展図録
☆特別展・企画展図録
☆豊島区地域地図集〔第一～六集〕
☆収蔵資料目録〔第一～八集〕
☆調査報告書〔第一～一五集〕
☆研究紀要・年報〔第一～一三号〕
☆館だより「かたりべ」

これらの図書は、郷土資料館の窓口のほか、豊島区役所分庁舎A館一階の行政情報コーナーでも販売してきました。また区立図書館でも閲覧ができますが、電話またはメールでお問い合わせいただければ、在庫と送料を確認のうえ、通信販売も行っています。

開設後まもなくから、刊行物のお問い合わせや、講座の申込みをいただいております。今後もますます便利に、内容充実の予定です。乞うご期待！　（薬師寺）

ホームページをご覧になるには、インターネットエクスプローラーが便利です。
ここに半角小文字の英数字で http://www.museum.toshima.tokyo.jp と入力して、
キーボードの Enter キーを押してください。豊島区立郷土資料館のホームページへようこそ！



お問い合わせ、ご意見ご要望もメールでどうぞ。
kyodo-shiryokan@city.toshima.tokyo.jp

Microsoft® Internet Explorer は Microsoft Corporation の製品です。Microsoft Corporation のガイドラインに従って画面写真を使用しています。

学芸員になるための第一歩〈博物館実習を終えて〉

◆実習期間中に行うこと

博物館学芸員の資格を取得するために必要な「実習」。今夏も、八月二九日から九月一一日までの間、六名の大学生が当館で博物館実習を行いました。

郷土資料館の事業としては、まず、展示会や講座の開催、地域資料に関する刊行物の発行等が思い浮かびます。しかし、博物館実習生の受け入れも、大切な仕事のひとつとして、当館では一九八四年の開館以来継続的に実施しています。ここでは、その概略を紹介しましょう。

二週間（実質一二日間）にわたる実習の主な内容は、次のaからfのとおりです。館長以下、学芸員・社会教育指導員総出で指導に当たります。また、文化財係の学芸員の応援も受け、実習の内容は多彩なものになっています。

a　資料館の管理運営と事業運営
当館発行の『年報』をもとに説明

b　施設見学
資料館の展示室・収蔵庫、雑司が谷旧宣教師館を見学

c　資料整理の方法と技術
主に歴史・民俗に関する資料・文書、図書等の整理方法を学芸員が講義し、実習生が実物に触れて実施

d　文化財関係
区の文化財保護行政の講義と見学

e　写真撮影の方法と技術
一眼レフのカメラを使い、資料撮影の方法と焼き付けを実習

f　展示シナリオの作成
実習の集大成として班ごとに展示案を企画

◆暑いなかで

実習期間中、実習生が事前に用意された"日替わりメニュー"をこなすことは当然ですが、天候の状態によってはきつい作業になることもあります。

なるべく実際の資料に触れる機会を提供しようという趣旨から、区民の方々から寄贈された資料を、学芸員の指導を受けながら実習生が整理することを試みました。資料整理の対象としたものは、西巣鴨にお住まいの方から寄贈された多様な生活資料でした。大量の資料を暑さにめげず整理している様子が下の写真です。

文化財資料調査室前庭での整理作業　２本の板状のものは、スキーの板。このストックが竹製だったことに驚く。

作業の手順は、まず、受入れしたときのダンボールの箱から資料を丁寧に取り出します。そして、ほこりを除き、ものによっては水洗いをします。その後、壊れかけているところはないか、注意しながらそのものをよ～く観察します。

時間的な制約もあったので、今回はひとつひとつのものに資料名をつけ、仮の目録を作成するにとどまりましたが、その数は、全部で一七六点になりました。なかには、よく見るものでも何という名前かがわからなかったり、実習生の親、あるいはその上の世代の方であればすぐにそのものの名前が言えるものであっても、実習生たちにとってはわからず、事典類と首っ引きの作業になったこともありました。また、新聞紙で包装された資料を開けるときには、新聞紙の記事の方が気になり、なかなか進まぬ暮れの大掃除のようになった時もありました。

本来ならば、このあとに、資料の原所蔵者から資料一点ごとに聞き取り調査を行い、その内容を調査カードに記録することで一連の作業が完結するのですが、実習期間中にそこまではできませんでした。それでも実習生の日誌には、「汗をかきながらの資料整理は、机の上では学ぶことができない実習でした。」との感想が記されており、こうした場を提供した意味があったと感じています。（福岡）

実習生六人衆勢ぞろいの図

郷土資料館　なんでもQ&A

大塚駅周辺のにぎわい

Q むかしは池袋駅周辺よりも大塚駅周辺の方が栄えていたと、地元の人から聞いたことがありますが、本当ですか？

A 時期や基準にもよりますが、そう言ってよいでしょう。

今の豊島区の大塚という地名は、本誌六八号のQ&Aで述べたように、一九〇三（明治三六）年に開業した大塚駅にちなんでつけられたもので、もともとの大塚は現在の文京区大塚あたりをいいました。大塚駅周辺が開けてくるのも駅ができた後のことです。それまでは農村地域で、人の出入りはそれほど多くありませんでした。開業当時の大塚駅の乗降客は、一日平均一二六名だったことが記されています（『巣鴨総覧』一一九頁）。しかし、一九一三（大正二）年に東京市電（路面電車）が大塚駅まで開通すると、急速に賑わいをみせていき、「乗降客の多いことでは山手線を通じて屈指のうちに属している」（同前）と言われるようになります。鉄道が通り、乗り換え駅となることによって、住宅地も増え、人口が集まるようになったわけです。一九一九年には大塚駅の年間乗降客数は三三〇万人を超えています。〔一九二五（大正一四）年には王子電車も大塚駅まで開通します。〕

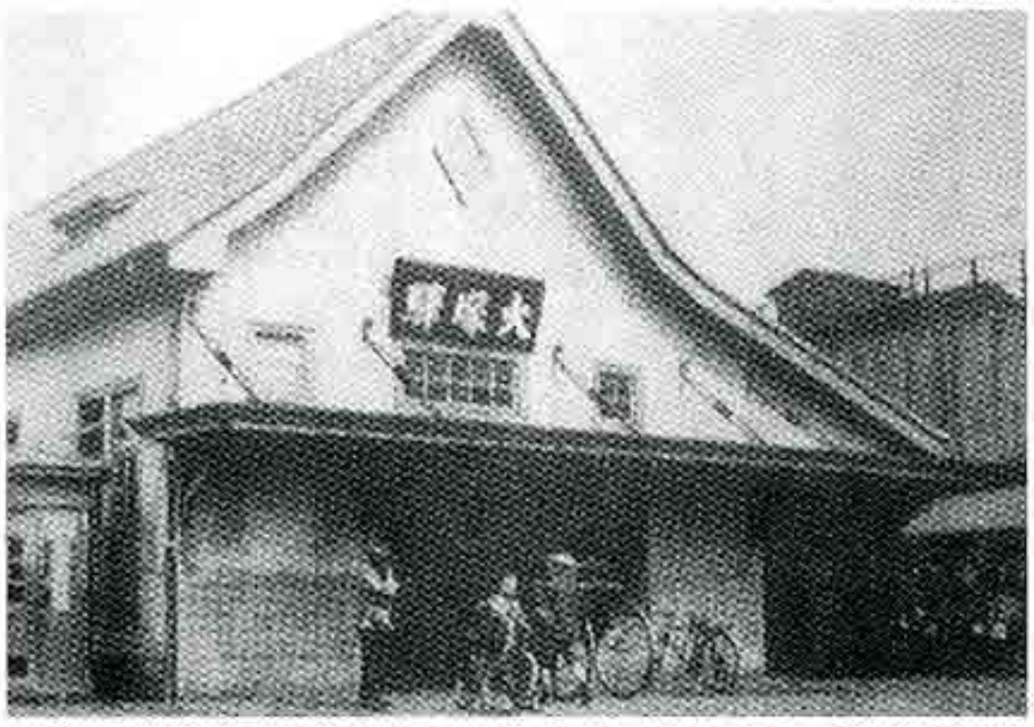
池袋駅周辺も、かつては農村地域だったものが、山手線の駅開業や、東上鉄道（現東武東上線）、武蔵野鉄道（現西武池袋線）の開通によって、ターミナルとして開けてくるようになります。一九二一年には、山手線の乗降客数で大塚駅を抜いてしまいます。〔大塚駅の乗降客数も依然として一九二九（昭和四）年までは増加を続けています。〕しかしながら、「当時豊島区地域の商業地の中心は大塚であり、（中略）その点池袋は何となく寂しい町並みで」あった（『豊島区史通史編二』八〇六頁）といわれるように、大塚の方が栄えているという印象がありました。その要因の一つに娯楽施設が、大塚駅周辺に多くでき、人出が多かったことがあります。

一九二二年には大塚三業地（さんぎょうち）が認可され料理屋などが軒をつらねるようになります。また、大正期には豊島亭・金松亭・鈴本亭といった寄席ができ、オヤマ館という映画館もできています。他に、白木屋デパートも大塚に出店します。池袋駅周辺にもこうした施設はできますが、東口方面に巣鴨刑務所（現サンシャインシティ）があったこともあり、限られていました。戦前までは大塚の方が娯楽の中心地としては知られていたのです。

また、一九二五年に認可された地下鉄計画路線には、新宿から日比谷・築地・本郷三丁目を経て、大塚駅に至る第四号線（現在の丸ノ内線の原形）がふくまれていました。同時に池袋駅や巣鴨駅を起点とする路線も計画されていましたが、大塚駅が、この時期少なくとも、こうした駅と同レベルの位置づけであったといえるでしょう。

その後、急激に池袋駅周辺は発展していきます。それは一九二三年の関東大震災後、東上線・西武線の沿線が住宅地として開発されていったことによるでしょう。特に、戦後は副都心計画の一環となり、デパートや映画館も集中するなど、商業・娯楽の中心地としての地位を確立し、現在に至っています。

（あおき）



昭和初期の大塚駅舎

大正期のオヤマ館前　当初は大衆演劇や女義太夫なども上演していた

セピア色の記憶

第7回　六ツ又ロータリーはなぜ消えた

左に示した二枚の写真は、ほぼ同じ地点から撮影した昭和三〇（一九五五）年頃と現在（平成一五年一一月一七日）の東池袋一・二・三丁目境にある池袋六ツ又陸橋（交差点）付近の様子です。地図に示した＊印は撮影地点を、⬇は撮影方向を示しています。

この場所は、明治通り、川越街道などが交差する道路交通の拠点であり、すでに戦前期には、写真にみられるようなロータリーが完成していました（ちなみに写真左斜め上方向は明治通りの王子方面になります）。しかしながら、戦後の高度経済成長期には、朝七時から夜七時までの一二時間に一日平均六万八〇〇〇台もの交通量（昭和三七年警視庁調べ）があり、その裏返しとしての交通渋滞、および交通事故が多発するドライバー泣かせの交差点となっていました。写真の中にも「事故多し」の看板が立っているのが確認できます。

そこで、警視庁交通部は、六ツ又交差点の状況改善のため、ロータリーを取り壊し、交差点中央部に新たにコントロールタワーを設置します（下写真）。この都内初のコントロールタワーは、高さ一一メートルの信号塔で、上部の管制室部分は直径五メートルの総ガラス張りで、一二角形の構造でした。内部では係官が道路状況を観察し、車がスムーズに流れるように信号を切り替える仕組みでした。

工事は昭和三七年六月に開始され、同年一一月二六日から管制を始めます。その結果、昭和三四年に四八二件、三六年に三八四件あった交通事故件数が、管制開始後一年間で七八件に激減します。それでも、ここでの事故件数は二位の渋谷駅前を大きく引き離しており、都内の事故発生件数第一位の「座」は変わりませんでした。

交通事故発生の抑制に画期的な効果をあげたコントロールタワーでしたが、交通渋滞緩和の切り札にはなりませんでした。それは「開かずの踏切」と呼ばれた池袋大踏切（次号にて取り上げる予定）の存在が、交通渋滞の根本原因となっていたためです。六ツ又交差点付近の渋滞問題は、昭和四四年一〇月の川越街道の高架化完成によりひとまず解消されることになります。

（秋山）

＊本欄は、『豊島区史　通史編四』の記述を参考にしました。

郷土資料館からのお知らせ

★収蔵資料展（常設展）開催のお知らせ

企画展「伊藤伊兵衛と江戸園芸」の会期が終了したため、郷土資料館では現在展示室を閉鎖し、展示替え作業を行なっています。一二月一〇日（水）からの収蔵資料展（常設展）の内容は、以下のとおりです。初披露となる収蔵資料もありますので、ぜひご来館ください。

◇植木屋伊藤伊兵衛の業績をさぐる

上駒込村染井（現駒込七丁目）に居住した植木屋伊藤伊兵衛に関する資料から、江戸の園芸文化について考えます。

◇敗戦直後の教科書から

戦後の新しい教育を、小中学校の教科書から考えます。

◇カストリ雑誌とヤミ市

戦争直後の「ヤミ市文化」を大衆雑誌等を通してさぐります。

◇ちょっとむかしの「おかいもの」

豊島区要町居住者から寄贈された「布巾」十数点から、当時の主婦による買い物事情を考えます。

★企画展「伊藤伊兵衛と江戸園芸」の展示図録販売のお知らせ

一一月三〇日（日）までの会期で開催していました企画展「伊藤伊兵衛と江戸園芸」の展示図録を二〇〇円で販売しています。展示内容とほぼ同じ写真や解説が収められていますので、ご来館の折にお買い求めください。

区民のための博物館用語の基礎知識

④燻蒸（くんじょう）

木製・紙製・布製・皮革製の収蔵資料を、害虫やカビなどから保護するため、資料に薬剤等を散布すること。各館の事情にもよるが、通常一年ないし二年に一度の割合で定期的に実施される。なお、主要な燻蒸剤のひとつである臭化メチルガスは、オゾン層保護法の規定により、二〇〇五年以降使用できなくなる。

▽用例△

学芸員A「燻蒸直後の収蔵庫に入ったら気分悪くなっちゃった。」

学芸員B「これで、少なくともあと一年間、ムシが付かないネ。」

学芸員A「あ・り・が・とっ！」

編集後記

早いもので一二月になりました。本文でも紹介しましたが、郷土資料館の公式ホームページが開通して二ヶ月が過ぎました。この間、すでに二〇〇〇名以上の方々がネット上で「来館」され、気のせいでしょうか、実際の資料館「来館」者も増えたような気がします。インターネット社会の到来を実感しています。

郷土資料館では、年間二回の展示会開催が定着してきたため、常設展のあり方や、展示替えの内容について軌道修正を試みています。来館者の方々にとってわかりやすく、また親しめる内容になるよう、やや時間をかけて考えていきたいと思っています。

（あき）

かたりべ
・
No.72
・
2003年12月1日
・
豊島区立郷土資料館
・
豊島区西池袋2-37-4
・
電話 03-3980-2351
http://www.museum.toshima.tokyo.jp